

- ・ (1) 第1回こども子育て専門部会

■第1回こども・子育て専門部会

日付	平成26年9月26日(金)
時間	19時～20時30分
場所	西成区役所 4-8会議室
出席者(有識者)	添田委員、寺川委員、水内委員
(地域委員)	荘保委員、上田委員、藤井委員、平山委員、藤見委員
(西成区)	小田子育て支援担当課長
(大阪市)	青柳こども青少年課企画担当課長、 阿部教育委員会指導部指導主事

1. 特区構想専門部会について

- 今までの西成特区構想・こども子育て専門部会の概要報告

2. 経過及び他区の取り組み状況について

○プレイパークについて

- ・今年度は補正予算となり、来年度以降の常設化に向けて調査を実施中(委託先：大阪市立大学)

○基礎学力向上について

- ・来年度から始まる学校選択制の導入に向け、学力の全体的な底上げが必要
- ・本部会では、来年度予算に結びつくような具体的な施策を検討していく
- ・学力向上の前に、生きる力や情操教育の必要性が高い
- ・西成区基礎学力アップ事業(西成まなび塾)の活動紹介

3. 大阪市教育委員会における基礎学力向上の取り組みについて

○教育委員会における学力向上のための取り組み紹介(学力向上グループで主に行っている事業)

- ・言語力の向上支援事業
- ・放課後ステップアップ事業
- ・理科教育推進モデル校事業
- ・学校図書館活性化事業
- ・学習サポーターの配置
- ・学習教材のデータ配信(今年度からの新規事業)

4. 区内小学校の状況

- ・区内の校長は皆、低学力の児童を抱え、学力向上が最大の課題であるという意識をもっている
- ・学力の高い学校の教師の資質が高く、低いところは教師の資質も低いということではない
- ・学力の低い学校の先生は、学力の高い学校の先生以上の指導力を持ってこどもにあたっていかないといけない
- ・学力向上のプロジェクトを立ち上げる必要がある
- ・学校というのは、新しい取り組みに対しては非常に消極的で教育改革が進みにくい現状がある
- ・区長が教育委員会区担当理事になったということを活用すべき

5. 区内中学校の状況

- ・学力の低さについて、各校の共通した課題がある
- ・家庭環境や生活環境の問題が大きい
- ・防災教育で色々な形で取り組んできた結果、自尊感情の向上に繋がっている
- ・学力の前にモチベーションを上げる取り組みが必要

6. 意見交換

- ・区内の子どもには、色々な人、もの、出来事との出会いの場が少ないため、出会いの場を作っていく必要がある
- ・やる気やモチベーションをあげて学習意欲を高める意識がベースになければならない
- ・今の先生は本当に大変な状況(教師の力量で何とか授業を成立させている状況)
- ・先生は子どもに尊敬される存在で、子どもとの関わりを大切にすることが必要である
- ・子どもの良い所を見つけて伸ばし、自信を付けさせていく。そして色々な人とふれあっていくということで、自尊感情が高まっていく
- ・地域の人材、ホンモノと学校をマッチングすることは重要で、区役所に担ってほしい
- ・ホンモノに出会うため、人材バンクやネットワークを作ってほしい
- ・子どもの遊びの場所が少なく、プレーパークが重要
- ・遊びの次に勉強へと繋がっていく
- ・足並みを揃え、区全体で取り組んでいくことが重要
- ・プレーパークを常設したときには、校区外の場所という問題がある
→区として校区という概念を取り払うことはできないか
- ・成績しか数字に表せない。違う価値を評価する方法が必要
- ・西成特区の施策で子育て世帯を呼び込む方向性があるが、現状では外からは入ってきていない
- ・地域の資源をどう活用するかということがキーワードになる
→ハードルの整理が必要
- ・子どもに選択肢がなく選べない状況にあることが問題

(2) 第2回こども子育て専門部会

■第2回こども・子育て専門部会

日付	平成26年10月15日(水)
時間	10時～11時30分
場所	西成区民センター 1-1会議室
出席者(有識者)	添田委員、寺川委員、水内委員
(地域委員)	荘保委員、上田委員、藤井委員、宮岡委員(平山委員代理)、藤見委員
(西成区)	小田子育て支援担当課長
(大阪市)	青柳こども青少年課企画担当課長

1. 第1回こども子育て専門部会の主な意見について

- ・学校単位の対応は限界があり、区全体で一つのイメージで取り組みをしていかなくてはいけない
- ・自尊心の向上が学力向上に繋がっていく
- ・学校や勉強が好きだということをも増やしていくような方策が必要
- ・スポーツや絵画等、趣味や特技を活かしてモチベーションをあげることなどの取り組みが必要
- ・小学生は校区外になかなか行く事ができない、その規制を取り払うにはどうしたら良いか
- ・新しい価値を生み出していく選択肢を増やしていくことが必要

2. 第1回こども子育て専門部会を踏まえての提案

- ・学校の先生は、授業以外の仕事も多く多忙
→地域や区がサポート体制をつくることが必要
→学習サポーターを区独自の人員配置にしては(スクールソーシャルワーカーの活用)
- ・教育学部を持つ大学の教育実習を、積極的に西成区で行うこともできるのではないか
- ・自尊心の向上に繋がるようなイベントやプログラムを区が率先して学校以外でおこなうことができないか

3. 意見交換

○アートと自尊心について

- ・普段と違うコミュニケーションのあり方として、人との関係や社会で生きて行く力に繋がっていくのではないか
- ・先生とマネジメントする人との関係、生徒とマネジメントする人との関係、アーティストとの関係、それぞれの関係を丁寧に結び結ぶような時間のかけ方が必要

○学校の状況

- ・先生がもっとやりたいと思ったことの延長線上に地域の方や区が必要
→予算や人員配置が課題
- ・学校ごとの課題に合わせたマネジメントも必要

○保護者の状況

- ・ほとんどの親は自分の子どもには関心があるが、他の子どもに一切関心がない
- ・地域交流や世代間交流等の企画をしても参加人数が少ない

○学校以外の居場所

- ・地域の資源を使って、子どもたちを育てていくことを考える必要がある
- ・地域にでて、いろいろな人たちに会うことが重要
- ・公園なども重要な場所になってくる

○繋がりやネットワーク

- ・学校間の連携、地域団体との連携、子どもたちに関わりたいと考えている地域の人たちが繋がる仕組みがつかれないか
- ・教育委員会の取り組みとして学童保育があるが、家庭と繋がることは大きな課題
- ・連携やネットワークを考えると、スクールソーシャルワーカーという制度は重要
- ・本当に学校に協力してくれる人が来てくれることが必要
- ・必要な貧困対策などが削られている実情がある
 - 区で補っていく必要があるのではないか
- ・学校が忙しくて先生が地域とつながっていくことができないという仕組みの矛盾がある
- ・人材を多く出す、地域と学校がつながる仕組みをどう生み出すのか詰めていく必要がある
 - 対策を行わなければ、予算もなく人もなく、地域もやる気がないという流れになっていく
 - 街の資源に気付く機会、使いこなしていく仕組みに対する支援も必要
 - 完全に閉じた学校の状況でどうするのかを考える必要がある
- ・ホンモノに出会えることが重要(サッカーなど)
- ・小学校の総合的な学習の時間で、地域と繋がる取り組みを実践している
- ・教育実習生や学生ボランティアも交えて学校を支える仕組みが必要

○校区の問題

- ・責任が学校になる場合が多いため、校区外にでないように伝えている
- ・プレーパークを実施するうえで課題となる

○西成特区構想

- ・給食を区内業者にできないか。職づくりに繋がるのではないか
- ・予算のある時にアクションを起こし、一般施策(持続的可能な仕組み)に繋げていくことが重要
- ・西成区のこどもの権利条約をつくって行くべきである
- ・集まれる場、システム的なものを考えてもらいたい
- ・要対協はそれぞれの学校の校区で動いているが、区全体で話し合う必要があるかもしれない

(3) 第3回こども子育て専門部会

■第3回こども・子育て専門部会

日付	10月23日(木)
時間	13時～14時30分
場所	西成区役所 4-8会議室
出席者(有識者)	添田委員、寺川委員、水内委員
(地域委員)	荘保委員、平山委員、藤見委員
(西成区)	小田子育て支援担当課長
(大阪市)	青柳こども青少年課企画担当課長

1. 第2回こども子育て専門部会の主な意見について

- 基礎学力向上のためには自尊感情を高める必要がある
- 自尊感情を高めるためには何ができるのか
 - ・アートや歴史的な資産、職人など全国に発信できる西成のホンモノを通じて高める
 - ・防災教育や被災地の視察などを通じて、自分が地域に役立つ体験を行う
 - ・こどもが活躍できる場を区や地域でプロデュースする必要がある
- 基礎学力を高める直接的なものは学校教育
 - ・学校教育を支えるための工夫が必要
 - ・地域教材や先生の多忙さを軽減する
 - ・時間的なサポートを区や地域が行う
 - ・地域と学校をむすびつけるソーシャルワーカー的な先生が必要(区や地域が肩代わりする形)
 - ・大学が西成区に優先的にボランティアや教育実習生を送り込む仕組みが良いのでは
- 区独自の取り組みの必要性
 - ・中学校の校長会のような、区レベルで話し合っていけるシステムが必要
 - ・学校以外のこどもの居場所づくりが必要
- こども憲章
 - ・こどもの権利条約の延長線上として憲章をつくっていくことが大切

2. 意見交換(学校教育をどのように支えるか)

- 区独自の取り組みの必要性
 - ・学校の大きな課題として、教師の授業力不足、教え込みが主流になっている
 - ・各校の取り組みだけでは課題解決に至らない
 - ・区として現場に下ろしていくことが一番早い方法(区の中で区担当理事をトップに)
 - 教育委員会を通さずに何かやるという事は今の制度的にできない
 - 現状でも、区単位でやれることはあるが、意思統一を徹底するために区担当理事が必要
 - ・教師の意識を変えても転勤があり、定着しない
 - ・各学校協議会が連合すると、自主的な西成区のシステムができるかもしれない
- ボランティアや教育実習との関係

- ・ボランティアとして大学生が入ってくることで、教師はモチベーションが上がり、こどもは自分も大学に行きたいという気持ちが高まる

○漢字検定などの区内の取り組みについて

- ・区独自の検定を作るのも良いと思う
→システムや問題をつくるためのスタッフを雇わなければならない

○西成区にやる気のある先生を集めたい

- ・先進的な学校教育をやっているということをアピール
- ・教育に熱心な区だとなれば、必然的に集まって来るのでは
- ・区内の学校でどこにどの先生が教えに行ってもいいとか、交流できるとか、お互いに違う学校の先生が来て授業力を向上させるとか、しんどい学校に、区内の力のある先生を送り込むことができるシステムができないか

○20校がひとつの大きな学校というイメージ

- ・実践例があるので出来る可能性がある
- ・スポーツの区長杯などのイベントも実施でき、区内のこどもたちの交流も盛んになる
- ・北と南では、状況が違う。こどもたちの交流を進めることが大事
- ・クラブ活動も連携して区内のどこへいっても良いということなら、こどもも喜ぶ
- ・校区から出たらだめというのもなくなるのではないか
- ・区全体となれば、区役所としても施策がやりやすくなるのでは

○地域との連携

- ・授業に色んな人が入って行って、実際に働いている人たちの話を聞くなど、授業を変えて行かないと変わらないのではないか

○先生・クラスについて

- ・学力テスト以外にも先生の評価軸があればよいのでは
- ・担任がいないチーム体制を実践し、チームの先生全員が担任なので誰に話してもいい。話しやすい先生に相談したら良いという枠組みを行ったことがある
- ・教員にはクラスに誰かが入って来るのを嫌がる傾向があり、オープンにして意識を変えて行かなければいけない

3. 意見交換(居場所について)

- ・居場所は、学校の中、家庭の中、まちなか等、多様な居場所がある
- ・地域とどうつながるかは西成の強みではないかと思う
- ・活躍の場、新しい価値生み出していくために、リアリティにつながる場所はどこかという問題
- ・地域の資源、ストックを活用した居場所がこどもの居場所になって、基礎学力向上につながる仕組みが点在しているイメージだと思う
- ・居場所は一番自尊感情が高まる場所と思う
- ・学校に居場所のないこどもが自尊感情を高めることができるしくみが必要
- ・色んな選択肢がある中で育つことが自尊感情を高めることにつながるのだと思う
- ・選択可能な居場所が作れるような政策設定

- 未利用地や空き地を使って、そこに教えてくれる大人がいる拠点を西成区全体に作っていく
- 区が居場所と認め、利用者に安心をあたえる仕組みは必要
- ・子どもが自然に集まる場所が居場所ではないか(公園など)
- ・居場所をつくる時にかならず安全対策をどうするかという問題がでてくる
 - 行政が関わると安全面が議論される
- ・西成の特性として、みんなで見守れるということを打ち出したら良いのではないか
- ・色んな人が声を掛けてくれるから守られていて安心という親と、声を掛けられるから怖いという親もいて、親によって認識が違う
- ・まちかどで本物に出会える場所をどうやってつくりだすか
- ・まちの人が関わりやすくなるような仕掛けが必要
- ・関わり方が重要で、責任と多様さのマッチングを議論し、提案できればよい
- ・大人の発想で作ったとしても子どもが行くかどうかわからない
 - プレーパークは自然で何もなく、子どもは自然にいろんな発想を持てる
- ・居場所として一番良いのは、学校の校庭を一般開放することではないか
 - 校舎の管理上問題がでる恐れがある
- ・遊び方を知らない子どもが多い
- ・居場所の種類は、個人的な居場所、社会的な居場所など、とらえ方は多様

4. 意見交換(子ども憲章について)

- ・見える化をして確認、他に発信できるのでは
- ・まちづくり条例や宣言みたいなものの方が、可能性があるのでは
- ・子どもを呼び寄せるとするのが特区構想では

(4) 第4回こども子育て専門部会

■第4回こども・子育て専門部会

日付	1月27日(火)
時間	19時～20時30分
場所	西成区役所 4-8会議室
出席者(有識者)	添田委員、寺川委員
(地域委員)	荘保委員、上田委員、平山委員、山崎委員(藤井委員代理)、杉本委員、藤見委員、乾委員、青野委員
(西成区)	小田子育て支援担当課長、苅谷子育て支援担当課長代理
(大阪市)	青柳こども青少年課企画担当課長 迫野こども青少年局こども家庭課長

1. 第1～3回こども子育て専門部会の振り返り

○こどもの基礎学力を伸ばすために自尊感情を高めることが大切という共通認識

○学校について

- ・区内の小・中・高校は、他の区とも同様、横の繋がりが希薄
- ・区で一つのまとまりとして連携する取り組みができないか
- ・区長がイニシアティブをとり、区で一つの学校というイメージで進めて行ってはどうか
- ・クラブ活動、教材研究、やる気のある先生を呼ぶ、先生同士の交流等
- ・漢字検定、区長杯などの区独自の活動
- ・区内地域の方、大学等との連携による学校の力の向上
- ・ボランティアと教育実習
- ・地域を歩き回るSW的な先生やスペシャリストの養成
- ・学校の雑用を地域の人が支える仕組み
- ・総合的な学習の時間は、地域の資源を使って学習できるのではないか

○こどもの居場所について

- ・こどもが安心して過ごせる時間と場所を確保する事が大切
- ・区全体あちこちに居場所があるということが自尊感情の醸成につながる
- ・ホンモノに出会う、それが基礎学力向上につながる

○西成区のこども憲章をつくるべき

2. 平成27年度予算要求状況について

○プレーパーク事業

○基礎学力向上支援事業

3. こども版地域包括支援の仕組みについて

○こども版地域包括支援の仕組みについて説明

- ・ 特区構想提言の中の中長期的な課題ということで、提言を受けたもの
- ・ 要保護児童対策地域協議会の調整機関として位置づけられている
- ・ 各校区で開催されているケア会議を要対協の実務者会議と位置づけ運営
→ケア会議ではほぼ毎月要対協事案を検証
- ・ 要対協を各区に作ろうという流れの中で、あいりん子ども連絡会議、北西部の教育サポート会議等が基盤となり、西成区においては校区ごとに立ち上げようという活動がすでにあり、その中で6中学校区ごとのケア会議を運営することとなった
- ・ 前段で立ち上がっていた地域の会議と後発の会議の差は、各校区の資料作成の統一化、運営方法の見直し等をし、平準化されてきた
- ・ 包括支援センターは、今動いている会議を有効なものとして包括支援センターの枠組みを入れ、友好的な運営をする中で底上げしていきたいと思っている
- ・ 本部会では、どこを補強すれば解決するかなどの意見をいただき、包括支援センターという枠組みを作っていきたいと思っている

4. 意見交換

○こども版地域包括支援について

- ・ ケア会議は困難を抱えた子どもをどう支援するかをプランニングしていく場
→プランニングに行くまでに困難を抱えているという事を可視化する場として、子どもも親も相談する場所を作る事が大事
- ・ 相談を受けるだけでなく、緊急の場合に対応できる機能を備えた包括的なものが中学校区に一つずつあり、それを統括するのが支援室であると思う
- ・ 特に小学校入学までの乳幼児期の支援は徹底して行うべき
- ・ 母子家庭の支援住宅やシェアハウスなどの支援が必要
- ・ 親たちが買い物に来るスーパー等の一角に子どもを預けられる場所、叱り方など、子育て情報を発信する場を作るべきだと思う
- ・ 生き抜く力というのは自分が生まれてきてよかったと思えるという事だと思う

○基礎学力向上について

- ・ 区の校長会がまとまって取り組んで、各校の校長の意識は高まってきている
- ・ 区の予算をいかに有効に使うかが重要
- ・ 先生の授業力向上、授業力をあげるためには研修をしていかなければならない
→区内の校長が他の学校で指導するというかたちに予算を使っていけば良いのでは
- ・ 学生のボランティアには西成にたくさん来てほしい
→大学生に憧れる子どもが出てくる
→現役の先生も刺激を受けて、授業をきちっとしようという気持ちになる
- ・ 格差社会を小さくしていくことにつなげることは、公立校が担うことになると思う
- ・ 来たい人だけ来ればよいというだけでなく、学校の中では強制、全員が参加できる仕組みが必要

○中学校教育について

- ・中学生が小学校に戻って交流、高校生が地元の中学生に対して先輩として何ができるかとか、つながりを持っていくことで、地域も中学生、高校生が入ってくると元気になっていく
- ・中学校では地域に関わる行事がない
- ・天下茶屋校下ではジュニアリーダー養成を行っている
- ・地域の側から見ると、中学生の存在は防災の面ですごく貴重

○こどもの居場所について

- ・地域がつながり、色んな目でみるという連携を地域でもっと持つ必要があると思う
- ・同じ思考のこどもが集まり単なる仲良しグループの集まりになってしまう
- ・似たようなこどもが集まってもおかしくないと思う
- ・自分が安心できる場所をこどもが自分で選んで行くことが大事
- ・互いの自尊感情を大事にし合うことのできる場所が居場所という事だと思う
- ・中学生ぐらいのこどもが遊べる場が少ない
- ・居場所はハード面ではなく、関わりやつながりだと思う
- ・色んなことができる場所という意味でのハードが要ると思う
- ・企業などまちの資源と子育てを上手くタイアップしていくことが大事
- ・こどもが逃げないような授業の内容であったり、人員を配置したり、こども同士で教え合うかたちなど考えていくべき
- ・居場所をまず大人が作っていかなくてはいけない
- ・居場所にはソフトもハードも機能として必要、もっと議論を深めたい
- ・プレーパークもこどもの居場所になる
- ・居場所という概念には、それぞれ違う思いがある
 - 自分が安心する場所、ネットワークがあり色々な人との出会いがある場所、ハード的な居場所とソフト的な居場所

(5) 第5回こども子育て専門部会

■第5回こども・子育て専門部会

日付	2月19日(木)
時間	19時～20時30分
場所	西成区役所 4-8会議室
出席者(有識者)	添田委員、寺川委員、水内委員
(地域委員)	荘保委員、上田委員、藤井委員、平山委員、杉本委員、藤見委員、乾委員、青野委員
(西成区)	小田子育て支援担当課長、苺谷子育て支援担当課長代理
(大阪市)	青柳こども青少年課企画担当課長 迫野こども青少年局こども家庭課長 中野教育委員会事務局教育活動支援担当課長

1. 第4回こども子育て専門部会の主な意見について

○「居場所」というキーワード

- ・こどもが安心できる場としての居場所を通して自尊感情を育成させる
→こどもがしんどいことから逃げるができるシェルターのような意味
→自分の活躍の場があるという意味
- ・交流が発生する居場所
→子育て中の人々同士が語りあえる場所など

2. 新しい居場所づくり/支える仕組みづくりワークショップについて

- ・2月13日、プレーパークを中心とする新しい屋外型のこどもの施設、仕組みを作ろうと西成区が予算化をした中の準備・調査事業の一部として開催した
- ・閉校となる小学校の跡地利用が適切であるという調査結果をもとに、津守でモデル事業を実施する
- ・事例紹介を踏まえ、支えていく仕組みづくりなどを学んだ
- ・ワークショップ形式で下記の内容を議論した
→こどもたちはどんなことをしたいか、学校を使うことによる可能性や遊び道具について、こどもや親の責任について、こども目線とはなにか、行政が関わるとは、場所の問題や誰が支えていくのか、給料を出していいのか、ボランティアで支えていいのか

3. 大阪市立大学ボランティア連携教育実習制度について

- ・既存の制度を結び付けて西成区に学生を呼び込めないかということで提案した内容
- ・大阪市立大学は小学校の教育課程がないので小学校に行く機会がないが、ボランティアでは幼稚園や小学校にも行くことが可能
- ・まずは西成で展開し、それを呼び水にして広めていきたいと思っている

- ・ 昨年からのこの部会で課題として挙げたように、なかなか西成に教育実習に来てもらえないということなので、うまくマッチングしていきたい

4. 意見交換(プレーパークについて)

- ・ プレーパークはあくまでも、こどもが中心
- ・ こどもたちが遊ぶ環境をどう大人がどう支えるか、その仕組みづくりである
- ・ プレーパークのことをちゃんと知ってもらうことが重要
- ・ 本当に西成区に必要なのかをもう一度改めて考えないといけない
- ・ プレーパークがどういうものかわからないという意見が多い
- ・ プレーパークは日本の社会ではなかなか作れなかったもの(ケガは誰の責任かという問題が大きい)
- ・ プレーパークはこどもがしていることを見て、それにどう関わるか、こどもの視点で見ることが大切で、大人が準備するのではないというところが子育てネットのあそぼパークでやっていたことと違う部分
- ・ みんなが関われるような場所が良いということになればプレーパークという名称ではなく、こどもの居場所づくりプロジェクトとしてやっていった方が良いと思う
- ・ 西成区はこういうこどものための施設や居場所が必要で、そのためにはどのような設備や制度、ボランティアが要るかを考えて、それがたまたまプレーパークのようなかたちであればプレーパークと呼ばば良いと思う
- ・ どんなボランティアが要るかなどはあとからでてくると思う
- ・ 基本的にはこどもが自由に遊べるというものだが、中にはひと花の人達が来てくれる、準備に携わってくれるとか、ボランティアとして関わっているという西成区的な要素・特性も出せる
- ・ 始まりはこどもの遊び場ということだが、そこから派生して色々な事業として学習支援など、小学生に限らず中高生の集える居場所になっていくと思う
- ・ 集まって来るこどもによってあとから生まれてくるもので、こういうものがあるからと言って初めからお膳立てすることはおかしいと思う
- ・ こどもたちが創造していくというところに主眼をおいてやっていかなければならない
- ・ 議論を積み重ねることが重要で、このままいくと形が先行して失敗していくのではないか
- ・ 色々な人と関わりができることで、こども中心であるということが生きてくるという意味
- ・ それぞれ活動基盤や言語、考え方、制度がちがうので、色々な齟齬がうまれる
→そのことを踏まえて、こども中心といいながら、違うセクターの人同士がどう話し合えるのかをお互いに気に掛けて話し合いたい
- ・ 本当にこどもたちの存在はどうなのか、何ができるのか、私たち大人が真剣に考えてこのプロジェクトを進めて行かないといけない
- ・ プレーリーダーの役割は、普通のボランティアではだめだと思う。それだけのものを勉強する必要がある
- ・ プレーリーダーがいて、他にボランティアに来てもらうかたちを考えている
- ・ 養成講座を受けたプレーリーダーが欲しい

- ・ワークショップでは、様々な跡地利用などの案がでた
 - 高齢者のことを考えてほしい、夜もスポーツができる場、屋内で子育てできる施設、教室などで保護者同士が交流できる場、高齢者とこどもの交流ができる場、校庭の一部を畑にして野菜をつくりながらこどもと交流、体育館に巨大迷路、校舎教室を利用した職場体験等
 - ボランティアは任せてくださいという回答があった
- ・結果として場が生まれてくる。始めに設定するのではなく、出発点はこどもが中心であるということを押さえておきたい
- ・西成区のこどもに一番欠けているのは自然とのふれ合いだと思う
- ・プレーパークを作るというのが本来の趣旨であり、最初からプレーパークをいわゆる総合的な居場所にするということではなく、まずは常設の遊び場をつくるということ
- ・これまでと違う仕組みにしないとプレーパークを運営できないということが、モデル事業を行ったことによりはっきりとわかった
- ・3月の津守小学校でのモデル実施では、地域の方、市大、にしなりあそびパークプロジェクトを中心とした区内の子育てボランティアさんにも参加いただく
- ・津守小学校跡地でやろうという事になっているが、その中で調査してみると、地域のニーズがある
- ・本来のプレーパークを共有する機会があると良いと思う
- ・こどもは遊びの中で育ち、体力、人間関係、ルールづくりをそこでやる
- ・プレーパークは遊びもカリキュラムを組んでやっているように感じる
- ・各町会に広場があるほうがよい
- ・必ず行政に管理責任を問われる
- ・井戸端プレーパークが一番良いことだと思う
- ・拠点を作るのが第一歩であり、まちなかにいっぱい出来ているのが本当は良い
- ・学校跡地は、もちろん地元の人から色んな使い方の要望が出てくるが、プレーパークとしては街中の未利用地が一番よいと思っている
- ・第一歩はここで始めて、サテライトで街角に色々できていくというイメージとしてあるのではないのか
- ・はじめはプレーパークの概念、理念を大事にしながらも、使っていくために今のシステムでは難しい部分、ニーズがあるので、多機能型を目指しつつ、やはり本来のプレーパークを作っていきたいという方向で動いていかないといけないと思う
- ・町のあちこちで特徴の違った居場所ができて良い。誰が管理運営するのか、責任はどうするのかというような議論ができる土壌をつくろうというのは大きな進展だと思う
- ・こどもはちょっとした時間でも遊びたいので、絶対に近くにないといけない
- ・結局色んな理想があるのだが、担い手がない。いくら居場所をつくっても担い手がいなければおわり
- ・モデル事業をやって課題を抽出するというので、担い手、場所、責任の話は絶対出てくる。それをどうクリアするか。いろんな人が話す場ができたのはまず第一段階で良かったと思う

(6) 第6回こども子育て専門部会

■第6回こども・子育て専門部会

日付	3月27日(木)
時間	10時30分～12時
場所	津守幼稚園 プレイルーム
出席者(有識者)	添田委員、水内委員
(地域委員)	荘保委員、上田委員、平山委員、杉本委員、藤見委員
(西成区)	小田子育て支援担当課長
(大阪市)	迫野こども青少年局こども家庭課長 宮本こども青少年局企画担当課長代理

1. 「プレーパークであそぼう in 津守小学校・幼稚園」の取り組み

- 「プレーパークであそぼう」の報告
 - ・25～29日の5日間実施
 - ・参加者：25日約90名、26日約130名
- 「はたらくってどんなこと」の報告
 - ・25日実施、約25名参加
- 「西成・子どもオーケストラワークショップ」の報告
 - ・28日実施予定

2. プレーパークであそぼう in 津守小学校・幼稚園

- フィールドの説明
 - ・穴掘り、かまど、プレイルーム、園庭、校庭、工作、ダンボール、庭園
- 開催風景



3. 意見交換

○フィールド資源が多いと感じる

○アーカイブ化

- ・本、図鑑、写真、文章、銘々したもの、活動の記録に残したい
- ・過程を大事にして残したい

○大人の関わり

- ・大人はこどもからのアクションがあれば対応する

○立ちカマド

- ・イベント的なものでプレーパークには必要ない(大人がつくり込む必要はない)
- ・火をおこしていい場所は設定する必要がある

○ダンボール

- ・サイズをいろいろ用意することで発想が広がる(選べることが大事)

○体験学習的に使われている気がする

- ・プレーパークはドッチボールや走り回ったりして体を動かすイメージがあった
- ・集団で遊ぶことが大事
- ・大人の管理下のような気がする、運営者側の用意は必要なく場所の提供のみ
- ・遊び慣れた子どもたちと、慣れていない子どもたちがいる
- ・集まった子どもたちがルールを作っていくことが「遊び」になる
- ・全体としてイベント的なものになっている
- ・一人でも遊べる場所があることも大事

○2日間の利用者の状況

- ・朝は親子連れが多かった
- ・昼からは高学年も来ている
- ・リピーターが多い(校区外も多い)

○安全管理への対応

- ・現状では擦り傷程度が2件
- ・チェック体制は議論して、今日から名前と電話番号の確認は実施している
- ・自由に入れることは良いが、ケガの時の対応も必要

○プレーパークの常設に向けて

- ・日々変わっていく事が大切
- ・自由に遊んでいるのが一番
- ・今回はイベント型(お膳立て)だが、常設では自由に使ってもらいたい。

○ボランティア、スタッフ

- ・津守小学校校下のボランティアが1/3以上
- ・スタッフは毎日変わっている

- ・西宮プレーパークのスタッフが数人来てくれている
- ・ボランティアだけでは無理で、必ずリーダーをおく必要がある
- ・津守小学校では、リーダー4人は必要

○遊びの内容

- ・昔遊びの伝承も必要ではないか(ケンパ、ゴム飛び、コマ回しなど)
- ・ここに来たら遊びを教えてもらえる場所になったらよい
- ・大人が仕掛ける遊びと、こどもを自由にする部分の線引きが難しい

○中高生の夜の居場所

- ・今のモデル事業段階では地元意向を汲んで16時までにはしている
- ・他のプレーパークは19時までに行っている

○交通アクセス

- ・徒歩、自転車が多い
- ・馬車があればいい
- ・萩之茶屋から津守小学校までは20分以上かかる。子どもだけでは行けない
- ・赤バスみたいなものがあれば良かった
- ・ここに来られる子と来られない子ができる

○来年度以降の常設に向けたスケジュール

- ・H27年度は詳細な設計を実施
- ・H28年度4月以降には本格的な事業を開始したい

○プレーパークのコンセプト

- ・プレーパークはこどもの遊びを応援、保証する場であり、コミュニケーションの場ではない
- ・「プレーパーク」と「居場所づくり」を明確に分けたほうがいい
- ・小学校跡地利用は、様々なニーズがあり、高齢者などのニーズも含めた考え方が必要
- ・子育て支援になるような活用を望んでいる声もある
- ・事業名称の整理が必要

○校区外の問題

- ・校区外への活動は、プレーパーク以外(図書館等)も含め家庭で理解してもらわないといけない
- ・現状の校区の考え方では、親と一緒にないとこどもは来られない
- ・学校選択性であっても校区の考え方は変わらない
- ・校区を越えたルールづくりが必要